

「愛なる神と義なる神」

2012年7月14日

昨年秋から半年間、東京にある神学校の聴講生として神学を学ぶ機会が与えられました。クリスチャン経験が豊富で優秀な生徒のみなさんに交じっての学びは、私にとって大変有意義であり、刺激的な時間でした。神学の授業では様々なトピックスについて意見の交換をし、今まであまり重要とは考えていなかったテーマも、新たにその重要性を感じる事が出来ました。

そのような学びの中で、私はある聖書の箇所に疑問を感じ出しました。それは十字架の上でイエスが叫ばれた言葉です。(マタイ 27:46)

三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」という意味である。

この状況としては、キリストが既に十字架につけられ命もあとわずかという場面で、はりつけ状態になったキリストが発した、まさに「悲鳴」です。

この部分だけを聴くと、キリストは神に見捨てられた事になっています。神の御子がどうして神に見捨てられるのでしょうか？本当に神はそんなに冷たい方なのでしょうか？

「父の涙」という曲があります。ご存知でしょうか？歌詞はこうです。

心にせまる父なる神の愛、愛する独り子を十字架につけた
人の罪は燃える火のよう、愛を知らずに今日も生きて行く
十字架からあふれる流れる泉、それは父の涙
十字架からあふれる流れる泉、それはイエスの愛

どうも私にとっては、この賛美の歌詞の方が、父なる神が十字架を見下ろしている時のイメージにぴったりのようです。憐れみといつくしみ、愛にあふれた父、という感じではないでしょうか？他人の罪の為に十字架にかかり、今まさに命を落とそうとする我が子をじっと見守り、見つめる神の姿です。

まさか神が、最後の最後でイエス様を見捨ててしまう事なんか、あり得るのでしょうか？

実は、私が中学生の頃、そしてまだ洗礼を受けていなかった頃、教会の説教でこの箇所の説明を聴きました。その時牧師先生は詩篇 22 編を引用して、説明してくれました。これはダビデの賛歌であり、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」から始まりますが、実はその後は神へのゆるぎない信頼と救いの希望を歌った詩篇へと変わります。

イエスは十字架の上においても尚、父なる神に信頼を寄せていた、との説明でした。

このような解説は、皆さん今までよく聞いた内容だと思います。私もこの説教を聴いて「なるほど」と思い、それ以来つい数カ月前までは何の疑問も持たずにいました。

しかし父なる神は、本当にキリストを十字架上で見捨てなかったのでしょうか？

実は先ほど述べた神学校で受講した組織神学のクラスで、この部分に関して担当の講師が私に問いかけました。「この聖書の箇所は、詩篇 22 編よりキリストの父なる神に対する信頼を表している、と解釈する事も出来ます。しかし、どうでしょうか？神は、本当にキリストを見捨てなかったのでしょうか？確かにキリストご自身が、『見捨てられた』と言っているのですよね？」この議論に関しては、授業ではこれ以上先に進む事もなく終わってしまいましたが、この日以来ずっと私の心に引っかかっています。

父なる神は、本当にキリストを十字架上で見捨てなかったのでしょうか？

皆さんは、どう思われるのでしょうか？

そこで今日は、この疑問を「愛なる神」と「義なる神」という、神さまが持つ二つの性質を見ながら考えてみましょう。

但し、この二つの性質を考える前に、一つだけはっきりとしておきたい事があります。それは「全能なる神」という考え方です。

「全能なる神」

私たちは先ほども「使徒信条」を唱えました。その出だしは、「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」です。私たちは「神が全能である事を信じている」と告白しています。しかし私達が告白する「全能なる神」とは、どういう事を意味するのでしょうか？

「全能」と言う限り、「何でもできる」、言い換えると「神に出来ない事は、何も無い」という事を意味するはずですが、でも、本当に神に出来ない事は何かないのでしょうか？

例えば、神には4つの角をもつ三角形を描く事が出来るのでしょうか？もちろんその様な事は出来ません。では、なぜでしょう？

我々は、4つの角を持つ形を4角形と定め、3つの角のものを3角形と定めています。したがって、「4つの角を持つ3角形」は本質的に矛盾しています。神はその性質に矛盾する事は行われなからです。

それでは、神には罪を犯す事が出来るでしょうか？この問いかけに対しても「いいえ、出来ません」と言うしかありません。やはり、先ほどの例と同様に、罪を犯すという事は、神ご自身が持つ本質的な性格、すなわち「本性」に矛盾するからです。

したがって、私たちクリスチャンが言う「全能なる神」とは、「神ご自身の本性や、理論的に矛盾しない事なら何でもできる」という理解に立っています。もともと三角形が持つ性質に矛盾するものは存在しません。また神ご自身は「正義」という性質をもつため、神ご自身が罪を犯す事ありません。神は「正しい事を行う」のではなく、神が行う事全てを正義と呼ぶからです。神ご自身は、正義か不義を判断しながら行動する必要はありません。神ご自身が既に正義だからです。

この様に神は、ご自身の本性に矛盾しない事柄に関して「全能の神」とされるのです。

「愛なる神」

それではまず、愛なる神という性質を見てみましょう。聖書の様々な個所に、神がどれだけ私たちが愛して下さるか、が示されています。特に有名なのはヨハネ 3：16 でしょう。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

愛の神は、我々を愛さずにはられません。愛は神の本性だからです。したがって、神は、罪に堕ちてしまった我々をかわいそうに思い、憐れんで下さります。神の愛は「憐れみ深い愛」です。神は我々が、一人として滅びない事を望んでおられる、とおっしゃいます。

そして神の愛は「憐れみ深い愛」だけではなく、「恵み深い愛」の持ち主でもあります。私たちの心の中にも「憐れみ深い愛」は沢山あります。悲劇に遇った人たちを見て憐れんだり、苦しむ人たちを憐れんだり。憐れむという事はそれほど難しい愛ではありません。しかし、確かに神は「恵み深い愛」を豊かに持っておられる方です。

それでは「憐れみ」と「恵み」の違いは何でしょう？何となく似ているような言葉で、我々はよく、この二つを混同してしまいがちです。この二つの愛の大きな違いは、「行動が伴うか、伴わないか」です。我々は悲劇に遇った人たちに「憐れみの愛」を示す事はしますが、行動が伴った、すなわち「恵み豊かな愛」をなかなか実行することが出来ません。

日常生活の些細な事においても、この「恵み深い愛」を示すのは難しい場合が多々あります。例えば私が電車に乗って腰かけていると、次の駅で足の弱い高齢の女性が乗車してきました。

すると、私の心の中ではすぐに「憐れみの愛」が活動を始めます。しかし、自分の席を立て「どうぞここにお座り下さい」と、行動のともなった「恵み深い愛」を示すには勇気が必要です。このように単純な事でさえ、「恵み深い愛」を示す事は私にとって簡単ではありません。

しかし神は私たちが憐れむだけではなく、実際に行動を起こして愛そうとされます。憐れみだけの愛なら、結局私たちは救われる事はありません。それは「義人はいない。ひとりもない。(ローマ 3:10)」と聖書が示す通り、我々は多かれ少なかれ罪を犯した者だからです。そして同じく聖書は「罪から来る報酬は死です。(ローマ 6:23)」と示す通り、我々すべては自分の犯した罪の報酬として、全員必ず死を与えられるはずでした。神が憐れみ深い神だけでしかなければ、我々が滅びてしまうのをご覧になって「ああ、可哀想だなー」と憐れんで下さるだけの神です。

しかし「恵み深い、愛なる神」は、我々の滅びを他人事としてではなく、ご自身が行動することによって命に連れ戻そうとして下さいました。このように、私たちの神はご自身の意志によって、進んで恵みを与えて下さる神です。

「義なる神」

さて、神は「愛なる神」であると同時に、また「義なる神」でもあります。神の義は、不義を憎まれます。したがって、罪を受け入れる事は一切出来ません。神は、見逃しても良いほどの「軽い罪」とか、到底見逃せないほどの「重い罪」という区別をされません。聖書は、はっきり「罪から来る報酬は死です。(ローマ 6:23)」と示しています。したがって、軽い罪であれ重い罪であれ、罪を犯してしまった我々は、全員死の宣告を受けてしまいました。

又一旦裁きの判決が下ると、その判決に基づいて完全に刑を執行されます。神は義ですから、罪を裁くのに、その手を緩められる事は絶対にありません。我々は、犯した罪によって背負わされる負債額の最後の一元を返済するまで、神がその刑を軽くされる事はありません。

「愛と義の葛藤」

しかし、ここで神の心の中に大きなジレンマが生じます。もし神が「愛だけの神」なら「可哀想だから、罪は大目に見てあげよう」と言えたかもしれません。また「今回の罪は無かった事にして、もう一度チャンスをあげよう」と言えたかもしれません。神が愛ならば、何度でも、何度でも、忍耐を持って我々の罪を赦す事もできたでしょう。しかし、その時々之间的感情にまかせて罪を見過ごすような神様なら、「義なる神」ではなくなってしまう。そして「全能なる神」は、その本性に矛盾する事が出来ません。

愛なる神は、我々が一人として滅びる事なく永遠の命を与えたい、と願いますが、義なる神は最後の一元に至るまで私たちが罪によって作り上げた負債額全額を取りたてなければなりません。我々の犯した罪に対し、愛と正義は全く相反する事を要求します。

愛を貫けば義は成り立たず、義を貫けば愛はなくなってしまいます。

「解決策」

このどうする事も出来ないジレンマの打開を、神はキリストという存在によって見いだされました。それは皆さんがご存じの通り、我々の罪の報酬をキリストを通して、神ご自身が受け取られたのです。私たちが作ってしまった罪の負債を、神ご自身が肩代わりして支払われたのです。つまり、神は私たちの全ての罪をご自身の命と引き換えにされたのです。

実は、キリストがこの世にあらわれた当時のクリスチャンは、この点で大変悩みました。

初期のクリスチャンは、永遠の神、命の基となる神が「死んでしまう」という考えを受け入れるのに苦労しました。パウロがあれだけローマ書でキリストの十字架での死を伝えても、にわかに受け入れる事は出来ませんでした。神だけは死とは全く関係ない存在だ、と考えていたからです。

今、我々は平気でキリストの死を賛美し、多くの聖歌でも神が死なれた事を讃えます。神の死は、まるで当たり前の事のように、現代のクリスチャンに受け入れられていますが、よくよく考えると、あまりにも悲劇な事です。神さまが死んでしまうなら、それは神様ではない、と人間は考えるものです。神が死ぬなんて、天地がひっくり返る以上に、本来は絶対あり得ない事です。あってはならない事です。考えるだけでも、実は本当に恐ろしい話しです。

これは使徒ペテロでも同じでした。(マタイ 16) ペテロはキリストに対し「あなたは、生ける神の御子キリストです」と告白します。しかしキリストはこの直後に、自分はエルサレムで人々に捕えられ、殺され、三日目によみがえる、と説明します。するとペテロは「そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」とキリストをいさめます。ペテロが初めてキリストの事を「生ける神」と告白したにもかかわらず、ご自身は「殺される」という訳です。ペテロにしてみると、「イエスさま、今私が言ったでしょ？あなたは生きています神さまなのですよ。神さまは死なないのですよ」と言いたかったのです。

しかし、聖書はこの様に言っています。(ピリピ 2:6~9)

2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、

2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、

2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。

「全能なる神」はご自身の命を、その御手の中に持っておられます。それを守る事も、また捨てる事もお出来になります。そして神はその愛と正義の本性のゆえに、ご自身の命を捨てる事により、私たちを贖う事を決意されました。これは神ご自身のみが、成し得る事です。そして、その犠牲はあまりにも大きすぎるものでした。

「愛なる神」は私たちの罪を贖う為にご自身の命を捧げる事にされましたが、同時に「義なる神」はキリストの命をもって我々すべての罪の報酬と認められました。

キリストがただの人間なら、我々と同じように「義人」ではありません。義人でない人間は、自分自身の罪すら贖う事が出来ません。ましてや他人の罪を贖うなどとは、到底できない話です。人間同士が罪の償いをする事は出来ません。

しかし、キリストは神の御子であり、罪や汚れを一切持たない「神であるとともに、唯一の義人」であった為、私が生まれてから死ぬまでの間に犯す全ての罪を背負う事が出来ます。勿論私だけではなく、皆さんを含む世界中全ての人々の罪を背負われます。

そして一旦、キリストが我々の罪を背負って十字架についた以上、義なる神はキリストを全ての罪が集約されたもの、とみなされます。我々一人ひとりの罪の報酬は、今や十字架上のキリストに対して与えられる事になりました。

キリストご自身が我々の罪のなだめの供え物として、ご自身を神にゆだねられたからには、義なる神はキリストが背負った罪に対し、徹底的にそして完全な処分を下されます。そこに一切の容赦はありません。

神は義ですから「罪からの負債は、ちょっとだけ支払えば良い。ちょっとだけ苦しめば良い。」などとは決して言いません。そして神ご自身が我々の罪の負債を代わって支払われる以上、徹底して支払われます。神は、最後の1円の負債まで余すことなく返済されます。神はごまかしません。義だからです。神は情け容赦なく、我々の罪を背負ったキリストを裁かれ、死に渡されました。バプテスマのヨハネからの洗礼の時に鳩のように下ったあの「聖霊」にも、そして「父なる神」からも見捨てられ、罪の報酬である死を受けて、我々の罪を贖わなければなりませんでした。

キリストが十字架上で、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」と叫ばれた瞬間、キリストが担った全ての罪に対し、義なる神の中に罪を燃やしつくす怒りの炎が燃え上がっていた事を、私は信じるようになりました。義なる神は、我々一人ひとりの全

ての罪と悪を背負ったキリストを、完全に見捨てられました。そして神はキリストに死刑を宣告され、最後にその刑は完全に施行されました。

「キリストを見捨てられた神、義の神を褒めたたえます。キリストを見捨てて下さってありがとうございます。」と私は、ここで賛美します。

しかし、皆さんの中には「なぜキリストを見捨てた神を褒めたたえるのか？」と不思議に思う人もいるでしょう。

それは、神がキリストを十字架上で見捨てられたゆえに、私たちには「赦しの確信」があるからです。

私たちの罪の赦しに対する「完全なる確信」は、「神ご自身が、御子を完全なる身代わりとみなし、容赦する事なく、あますことなく、完全に我々の罪をキリストにおいて裁き、そして最後の1円に至るまで私たちの罪の報酬を受け取られた」という事実に基づきます。

神がもし十字架のキリストをご覧になり、罪の処分に手加減を加えたならば、今我々には完全なる罪の赦しの確信がありません。「もしかすると、残りの罪を神がいつか思い起こされるのでは？いくらなんでも、これほどの罪は、神も赦して下さらないのでは？」等の不安が残ります。

したがって、完全な赦しは、「完全な裁き」の上にもみ成り立ちます。そして義なる神は完全なる裁きをキリストにおいて既に施行され、その裁きは完了しました。

また神は義なので、ご自身が行った完全な裁きを今後ひっくり返し、再び我々を裁かれる事等、絶対にあり得ません。義なる神だからです。

我々自身にとって都合良く解釈すると、「既に我々の罪の全てをキリストにおいて完全に裁いてしまった神は、もはや我々の罪をもう一度裁き直す事が出来ない」という事です。もし、裁き直したいと思われても、神にはもうそれは出来ません。これは神ご自身の性質の矛盾する事が出来ない、全能の神だからです。したがって、我々は罪の赦しが完全であったかどうかを心配する必要はもうありません。

私たちの罪は全て、「ひとつ残らず」キリストによって贖われました。あの時、十字架の上で神から見捨てられるはずだったのは、キリストではなく本当は私たち一人ひとりでした。しかし愛の神は罪からの負債の支払いを私たちに要求する事なく、神ご自身が、ご自身の命を持って完済してくださいました。

聖書はこう言います。(ローマ 3 : 23 - 26)

3:23 すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、

3:24 ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

3:25 神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。

3:26 それは、今の時にご自身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

ハレルヤ。この御言葉通り私たちは何も心配する事なく、疑う事なく、安心して神の赦しにあずかる事が出来ます。これはキリストを信じる者であれば、「誰にでも」無償で与えられます。

キリストが十字架から「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた時、愛なる神は我が子キリストの苦しみを目の当たりにし、先ほどの賛美の歌詞にあるように涙を流された事でしょう。しかし同時に義なる神はキリストにあって全ての罪を徹底的に、そして完全に裁かれました。

そして神は完全な罪の赦しと共に、キリストの復活による完全なる救い、永遠の命を私たちに与えて下さる、と約束されます。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びる事なく、永遠のいのちを持つ為である。(ヨハネ 3 : 16)

これが、神が宣言された約束です。

「完全なる赦し」が与えられた者には、同時に「完全なる救い」が与えられます。「罪は赦すけど、救ってはあげない」など、あり得ません。赦しの目的は「救い」だからです。神は救いという恵みを与える為の全ての働きをご自身で行われました。

我々がこの赦しと救いを頂く為に必要な事は、イエス・キリストの名を呼び求めるだけです。

(ローマ 10 : 13) 「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。

神の大き過ぎる犠牲によって与えられた恵みを、今日みなさん一人お一人に受け取って頂きたいと願います。アーメン。

メッセージ：ベサニーキリスト教会役員 土屋 素明